

(表1) 1998年度 単元一覧 (カリキュラム)

単元名	学年	単元構造 (教材)			指導目標 (学力)		備考 (学習活動等)
		教材名	教材特性	教材関連の視点 (単元の趣旨)	認識内容	認識・表現方法	
1 自己	1	<自己の内の子ども性> ①「社会的な自己をどう確立するか」(随想) 小此木啓吾 (『現代人の心をさぐる』) ②「子供」(詩) 石垣りん (『詩集 表札など』花押社) ③「どうすれば虹の根元に行けるか」(随想) 黒井千次 (三省堂「国語Ⅰ」)	①「大人になる」ということを社会性の獲得という観点から論じたもの。 ②大人から子どもを見たときに、その精神的距離の遠さを捉えたもの。 ③子どもの頃の疑問や不思議を追い続ける大切さについて述べたもの。	①はごく常識的に「子ども性＝幼児性」としてとらえ、それからの脱却の必要性を捉えさせる。その上で②で「大人になること」がプラス面だけで捉え得ないことを考えさせ、③で「子ども性」のプラス面に目を向けさせる。	社会性の欠如という意味での「幼児性」は捨て去る必要があるが、創造的な生き方をするには好奇心を持ち続け、謎を追い求める「子ども性」は大人になっても必要であることを認識する。	①随想という文章特性を踏まえた上で、要点をつかむ。 ②大人と子どもの象徴的「遠さ」を詩の言葉から捉える。 ③事例が主要な位置を占める随想の特性をつかむ。	○①②疑問点解明のためのグループ討論 ○単元のまとめの文章 (段落の柱指示・字数制限なし)
	2	<自己発見の方法> ①「二十億光年の孤独」(詩) 谷川俊太郎 (『二十億光年の孤独』) ②「つめた貝」(随想) アン・モロウ・リンドバーグ／吉田健一訳『海からの贈り物』新潮文庫) ③「コンプレックスの解消」(随想) 河合隼雄 (『日本人とアイデンティティ』創元社)	①自己を宇宙レベルから眺め、「孤独」の意味を問い直したもの ②物理的にひとりになる時間と空間を持つことの必要性を説いたもの。 ③他者との関わりから生まれてくるコンプレックスを糸口として、自己を考えようとするもの。	①は宇宙レベルで自己を捉える、日常性を突き抜けた相対化の方法、②は長期的にひとりになる時間と空間を持つ、日常から離れた場所で自己を見つめる方法、③は自分の劣等感コンプレックスを糸口にして、日常の他者と関わる生活の中で自己を発見する方法であり、発想スケールの大きいものから、日常生活に関わるものという配列を考えている。	自己を個性的に捉え、意識的自己理解を認識する。	①言葉遊び的おもしろさを味わいながら、発想スケールの大きさをつかむ。 ②比喻内容を的確に捉えながら筆者の主張がどのように展開されていくかをつかむ。 ③事例内容を的確に捉えながら筆者の主張をつかむ。	○①疑問点解明のためのグループ討論 ○単元のまとめの文章 (段落の柱指示・字数制限なし)
	3	<自己変革と自己受容> ①「孤独と連帯」(論説) 小原信 ②「白い巨大な」(詩) 黒田三郎 ③「内部と外部の世界」(随想) 黒田三郎 (『内部と外部の世界』)	①人は孤独な存在であることを自覚するからこそ連帯が生まれることを説いたもの。 ②街の雑踏の中での孤独を取り上げたもの。 ③詩が人の胸に忍びこむのは個人として孤独の裡に自己を見いだす時であるとし、詩人と民衆との関係を考察したもの。	①で孤独であるからこそ連帯が生まれることを認識し、②でその孤独感というものが何から生ずるものかを考え、③で何によって人との連帯が可能であるのかをつかむ。	「孤独」とは何か、またそれへの対し方を考えることを通して、自己受容しつつ自己変革を試みることの必要性を認識する。	①論説という文章特性を踏まえながら、筆者の論の組み立て方を把握する。 ②「こうもりがさ」に象徴される雑踏での人のあり方を、詩人はどのように捉えたのかをつかむ。 ③詩の可能性をどのように説明しているのかをつかむ。	○単元のまとめの文章 (段落の柱指示・字数制限なし)

単元名	学年	単元構造 (教材)			指導目標 (学力)		備考 (学習活動等)
		教材名	教材特性	教材関連の視点 (単元の趣旨)	認識内容	認識・表現方法	
2 言葉	1	<言葉であそぶ> ①「かいだん」(詩) 関根栄一／「ごびらっふの独白」(詩) 草野心平 ②「不快千万」(随想) 内館牧子 ③「ワープロ爺さん」(小説) 清水義範	①視覚的に楽しめる詩と、聴覚的に楽しめる詩 ②最近の若い世代の言葉遣いを取り上げ、その問題点を指摘したもの ③ワープロを始めたばかりの高齢者が息子に書いた手紙という設定で、漢字等の変換ミスによるおもしろさを主人公のもどかしさと共にユーモラスに描いている。	①で、詩とは視覚的にも聴覚的にも楽しめることを知り、表現の多様性に気づかせる。②で自分自身の日常の言葉を振り返らせ、③で同音異義語等日本語の特性にも目を向けさせる。	言葉遊びの楽しさを味わいながら日常の自分自身の言葉を振り返り、言葉による表現の可能性を認識する。	①詩における視覚に訴える表現・聴覚に訴える表現の面白さをつかむ。 ②筆者の主張にどのような事例を用いて説明されているかをつかむ。 ③同音異義語の面白さと共に作品設定の面白さに目を向ける。	○②疑問点解明のためのグループ討論 ○単元のまとめの文章 (段落の柱指示・字数制限なし)
	2	<言葉でとらえる> ①A「あけがたには」(詩) 藤井貞和／ B「鉛の唄」(詩) 川崎洋 ②「言語の開く世界」(論説) 中村雄二郎 ③「感情と向き合って生きよう」(論説) 飯田雅 (朝日新聞 1998/2/25 付「論壇」)	①Aは日本語の助詞の使い方に材を取ったもの。 Bは言葉を擬人化して、言葉のもつ表現の曖昧さを取り上げたもの。 ②ものが名を持つことによって開かれる世界について言及したもの。 ③「キレる」という今の流行語を取り上げて、言葉が人間の生き方に密接につながるからこそ「感情と向き合って生きること」を主張したもの。	①から言葉の柔軟性による表現の可能性と不確定性を考えさせ、②で言語が人間の認識手段としてだけでなく認識方法にも関わっていることを捉えさせる。③で言葉がそれを用いる人間の生き方に密接につながっていることを踏まえ、自分自身の言葉を振り返らせる。	言葉そのものの特性 (柔軟性による表現の可能性と不確定性) とそれを用いる上での特性 (人間の認識手段であり、認識方法にも関与する) を認識する。	①助詞一語による意味の異動をつかみ、畳みかけるような表現法や逆説的表現法に目を向ける。 ②筆者の論の展開の仕方を把握する。 ③どのような論展開の上で筆者の主張が提示されているか、またそれは適切かを考える。	○①②疑問点解明のためのグループ討論 ○単元のまとめの文章 (段落の柱指示・字数制限なし)
	3	<言葉でつくる> ①「修辭的鑄掛屋」(詩) 吉野弘 ②「穴のあいた修理」(随想) 吉野弘 (『詩の楽しみ／作詩教室』岩波ジュニア新書 52) ③「エープリルフール雑感」(随想) 白井健策 (朝日新聞 1994/4/1 付『天声人語』)	①不適切な言い回しから新たに生まれたイメージに材を取ったもの。 ②①の「修辭的鑄掛屋」が生まれる過程を説明したもの。 ③回文から発想して、ものごとを逆さまに見る方法の可能性について述べたもの。	①で言葉が喚起するイメージの豊かさについて考えさせ、②で詩人はそのイメージの豊かさをどのように組み立てていったかを捉えさせる。③では言葉遊びがつくる、「逆発想からものごとを捉える可能性」について、考えさせる。	言葉の使い手としての力量は、どんなものからでも材を取り、イメージ豊かに表現するところに在ることを認識する。	①詩の核となる逆説的発想をとらえる。 ②発想の転換がどのように説明されているかをとらえる。 ③「回文」という事例が文章中どのような用いられ方をしているかをつかむ。	○作品を作る ○単元のまとめの文章 (段落の柱指示・字数制限なし)

単 元 名	学 年	単 元 構 造 (教 材)			指 導 目 標 (学 力)		備 考 (学 習活動等)
		教 材 名	教 材 特 性	教 材 関 連 の 視 点 (単 元 の 趣 旨)	認 識 内 容	認 識 ・ 表 現 方 法	
3 社 会	1	< 親子関係から、日本の家族や社会を考える > ①「高校生の一行詩・母の詩」(詩)吉村英夫撰著(『一行詩「家族！」―父よ母よ、息子よ娘よ』講談社文庫・1996) ②「女が主人公の社会であれ」(随想) 福島瑞穂(『日本の家族を考える一女・男・家族のゆくえ』ミネルヴァ書房・1994) ③『「しあわせ」家族の嘘」(論説) 村本邦子(『「しあわせ家族」の嘘』創元社・1997)	①高校生が親に呼びかける形で書いた一行詩。 ②「日本の家族は日本社会に個人主義を根づかせなかった元凶」という状況から脱却するために日本の女性たちが自分自身の人生を生きる必要があることを述べたもの。 ③自分なりの価値観を育てるためのケア機能と支え・導き機能は両親に依らずとも、自らの内に持つことで果たせるものであることを論じたもの。	①で親に対する子としての高校生の視点について考える。②では日本社会の現状が家族の現状と密接なつながりのあることを捉え、母親の個人としての生き方を考えさせる。③では、子どもが自分なりの価値観を育てるために必要な機能は親に依らずとも果たせるものであることを知り、親子関係のみに依存しない開かれた人間関係への可能性を探る。	家族の中の親子関係を見つめ直すことで、家族の有りようが社会の有りようと密接に関わることを認識し、個として自分自身の人生を選択していくには何が必要かということを考える契機とする。	①一行詩は視点の鋭さを端的な言葉で表現するものであることをつかみ、自らも表現する。 ②比喻内容を的確に捉えながら主張に至る論の展開をつかむ。 ③「世代境界」「ケア機能」「支え・導き機能」の定義のされ方を確認しながら、筆者の主張をつかむ。	○① 一行詩を作る。 ○単元のまとめの文章 (800字意見文)
	2	< 職業から、日本の家族や社会を考える > ①「一人でも生きられる、でも一緒に生きられるといいね」(論説) 福島瑞穂(『福島瑞穂の弁護士生活ノート』自由国民社・1998) ②A「ガードウーマン」 B「肩叩き屋」 C「おもちゃ修理」 以上(聞き書き) 福田洋(『につぼんの仕事型録』小学館文庫 192・1998) ③仕事の聞き書き(生徒作品)	①性別役割分業が男には私生活を女には経済的自立を奪ってきたことを指摘し、その両方を所有する男女が共に生きる豊かさを提案したもの。 ②Aはデパート等で警備をする女性、Bはリストラによる再雇用斡旋をする男性、Cは定年退職後、趣味を生かしたおもちゃ修理をする男性の仕事を聞き書きしたもの。 ③学習者が自分自身の親に仕事の聞き書きをし、公開可と認めたもの。	①で性別役割分業では果たされない「仕事も、私生活(家事・育児)も」の、豊かさの可能性に気づかせる。②では人に嫌がられるような仕事やそれとは逆に定年退職後の、生活費を考えなくていい仕事をしている人の職業観・人生観を通して、職業に就くことについて考えさせる。③では自分の生活を支えてくれている親の仕事をを通して、自分自身の職業観を培う。	職業を持つことの意味を認識し、自分なりの職業観を育む。	①データを元にした論の展開の是非をつかむ。 ②どのようなことがらがどのように聞き書きされているかをつかむ。 ③予め、聞く項目を心づもりしておき、聞き書きしたことを2000字にまとめる。	○③ 2000字で聞き書きを書く ○単元のまとめの文章 (800字意見文)
	3	< パートナースhipから日本の家族や社会を考える > ①「出口を求めて―夫婦間暴力―」(ルポ・ルタージュ)(1998/11/10 付朝日新聞) ②「これからの女性の生き方」(論説) 神田道子他編著(『新・現代女性の意識と生活』・NHKブックス 661・1992) ③「自分の感受性くらい」(詩) 茨木のり子(『いささか2』・1975年)	①夫婦間の「ドメスティック・バイオレンス」の現状とその要因を報道したもの。 ②これまでの男女の関係のあり方を踏まえて今後のパートナースhipのあり方を提案したもの。 ③社会や周囲のせいにせずに自分の生き方を選択するあり方をうたったもの。	①では最近増加しつつある夫婦間暴力の要因が、夫婦の対等でない人間関係にあることを知り、②では対等なパートナースhipを築いていくためにはどのようなあり方がよいのかを考え、③ではどのような人生を送ったとしてもそれは自己の責任に処すべきものであることを自覚させる。	男女の関わり方が家族や社会のあり方と密接に関わることを認識し、パートナースhipのあり方を模索する。	①事例の取り上げ方に問題はないかを検討し、結論の是非を考える。 ②分類方法の是非を踏まえて、筆者の主張の妥当性を検討する。 ③提示された日常性のイメージを捉え、詩のメッセージ内容を考える。	○単元のまとめの文章 (800字意見文)

単 元 名	学 年	単 元 構 造 (教 材)			指 導 目 標 (学 力)		備 考 (学 習活動等)
		教 材 名	教 材 特 性	教 材 関 連 の 視 点 (単 元 の 趣 旨)	認 識 内 容	認 識 ・ 表 現 方 法	
4 自然・文化・科学	1	< 自然と人間 > ①「四行詩の道草」(詩) 高橋順子(『詩のレッスン―現代詩 100 人・21 世紀への言葉の冒険』入沢康夫他編著・小学館・1996) ②A「おーい でこーい」(ショート・ショート) 星新一(『ボッコちゃん』新潮文庫) B「物質の循環とごみ方程式」(論説) 八太昭道(『ごみから地球を考える』岩波ジュニア新書 192・1991) ③『「ごみゼロ社会」の思想」(論説) 八太昭道(『ごみから地球を考える』岩波ジュニア新書 192・1991)	①身近な自然との関わりを四行詩にしたもの。 ②Aは、突然出来た穴に、あらゆるものを捨てていたら、ある日空からそれら廃棄物が降ってくる、という物質の循環をSF風に描いたもの。Bは人間が作り出した大部分の物質は生態循環が働かずごみとなり、人間の命を脅かしていることを論理的に説明したもの。 ③すべてのごみを資源として使う「ごみゼロ社会」を支える思想は、生態循環に倣ったものであることを論述したもの。	①で生活の中での自然との関わりを考えさせた上で、②で生態系循環に目を向けさせる。AとBとでフィクションと論説文という文種の違いによる表現方法の違いを把握する。③ではこれまでに描かれた未来社会は大きく二つの思想に分類できるが、それらの思想では「ごみゼロ社会」が達成できないことを踏まえて生態循環に則った社会システム構築の必要性について考えさせる。	自然との関わりなしには人間は存続し得ないことを踏まえて、生態循環を壊さないあり方の必要性を認識する。	①短いセンテンスから人と自然との関わりをイメージする。 ②表現形態の違いを踏まえ、同一テーマがどのように表現されているかをつかむ。 ③論の運びの是非を踏まえて、筆者の主張を検討する。	○② A と B の文種による表現形態の違いを捉える。 ○単元のまとめの文章 (800字随想)
	2	< 時空の中の人間 > ①「時を駆ける少女・Fly Me To The Moon」(詩) 松任谷由実／B. Howard ②「形なきものの形」(評論) 木村敏(『形なきものの形―音楽・ことば・精神医学』弘文堂・1991) ③「生と死のコスモグラフィ―」(評論) 山折哲雄(『生と死のコスモグラフィ―』法蔵館・1993)	①恋愛時の、時空を超える感覚をうたった歌詞。 ②自然科学が排除してきた「主観的時間」が、実は自然科学の成立に不可欠であったことを論述したもの。 ③日本家屋の「床の間」を取り上げ、庭に対置する第三の自然であることを論述したもの。	①で身近なことから時間や空間が個人の感覚に左右されることに気づかせておいて、②及び③で日常からは発想しにくい時間論・空間論に出会わせる。②ではこれまでも自然科学に相容れないとされてきた主観的時間の位置づけについて考え、③では床の間の新しい解釈に触れる。	時間感覚・空間感覚は共に個人の主観によるものであるが、文化的な影響を大いに受けるものであることを認識する。	①歌詞の中の比喻が意味する内容を捉える。 ②対比概念とされてきたものが実はそうではないとする逆説的展開を的確に捉える。 ③筆者の論展開の中での「第二の自然」「第三の自然」の位置づけを把握する。	○② 疑問点解明のためのグループ討論 ○単元のまとめの文章 (800字随想)
	3	< 近代科学の発達と課題 > ①「アイザック・ニュートン」(詩) 谷川俊太郎 ②「自然観の断絶」(評論) 富山和子(『水と緑と土』中公文庫・1974) ③「脳に映る現代」(評論) 養老孟司(『脳に映る現代』)	①ニュートンと恋人の会話という設定で、二人の自然への発想の違いをユーモラスに描いたもの。 ②日本人の自然観の断絶を指摘したもの。 ③真の高度情報化社会とは膨大な情報を処理しきることにあることを述べたもの。	①で科学的なものの見方が日常感覚とかみ合わない面白さを捉える。②では日本人の自然への対し方とその問題点を考え、③ではこれからの高度情報化社会では何が必要かを考える。	近代科学というものがどのような方向に発達してきたのか、同時にどのような課題を生じさせたのかを把握し、今後どのようなことが必要になってくるかを認識する。	①二つのものの見方を対比的に捉える。 ②ある時期を境としてその前後の日本人の自然観の違いを対比させて捉え、筆者の主張を検討する。 ③主張に至るまでの論の組み立て方の是非を検討する。	○単元のまとめの文章 (800字随想)

単 元 名	学 年	単 元 構 造 (教 材)			指 導 目 標 (学 力)		備 考 (学 習活動等)
		教 材 名	教 材 特 性	教 材 関 連 の 視 点 (単 元 の 趣 旨)	認 識 内 容	認 識 ・ 表 現 方 法	
5 人 間 (生 き 方)	1	＜状況と人間＞ ①「悩む力を失った若者たち」(報道文)藤生京子(「アエラ」98/12/21号) ②「あくる朝の蝉」(小説)井上ひさし(『四十一番の少年』文春文庫)	①最近の「癒しブーム」の背景は、悩む力を失っていることにあることを指摘したもの。 ②孤児院生活が辛くて祖母に会いに行くものの、引き取ってもらえる状況にないことを悟ってまた孤児院に帰る決心をする兄弟の話。	悩みに対してどのような対処の仕方があるかを二つの教材から考える。①で「ひたすら逃げる」ものの、②ではどうしようもない状況を「耐えること」で乗り越えようとする」ものを配置した。	悩みに対して、逃げずに持ちこたえる大切さを認識する。	①事例とその解釈、それから導かれる見解に分析し、筆者の主張提示の仕方と主張内容の是非を考える。 ②主人公がなぜ孤児院へ戻る決心をしたのかを、場面ごとの心の動きを追いながら捉え、そのあり方を考える。	○①結 論 の 是 非 検 討 の た め の グ ル ー プ 討 論 ○②疑 問 点 解 明 の た め の グ ル ー プ 討 論 ○単 元 の ま と め の 文 章 (8 0 0 字 小 論 文)
	2	＜ものの所有と自己存在＞ ①「パパラギが神様を貧しくした」(聞き書き)(『パパラギ』立風書房・1981) ②「赤い繭」(小説)安部公房・1950) ③「『浪費なき経済成長』の時代」(論説)内橋克人(朝日新聞「論壇」1999/1/7)	①サモアの酋長が初めて文明を見たとき、どのようにパパラギ(＝白人)がものを所有するかを捉えたもの。 ②日暮れ時、帰るべき家を求めてさまよう男が、自ら繭となって自己喪失してしまう話。 ③浪費に依らない、社会参加型経済構築の必要性をデンマークを例に論述したもの。	ものの所有の仕方によってどのようなあり方が規定されるのかを三つの角度から考えることを意図した。①で文明社会を外から見るとどのように見えるのか、その問題点を滑稽さと共に把握する。 ②では家の所有というものが何を意味するのかを考える。③では社会のあり方が個人の生き方に大きく関与することを踏まえて、どのような社会を構築していくべきなのかを考える。	ものの所有の仕方によって自分自身のあり方が規定されてくることが認識し、どのような所有の仕方が望ましいのかを考える契機とする。	①素朴な語り口だけに強烈な文明風刺となっていることを捉え、異なる価値観から見たときの視点の違いをつかむ。 ②帰るべき家がないという唐突な設定をどう捉えるかということから、作品世界の象徴性について考える。 ③筆者の論の展開の仕方をつかみ、主張の是非を考える。	○②疑 問 点 解 明 の た め の グ ル ー プ 討 論 ○単 元 の ま と め の 文 章 (8 0 0 字 小 論 文)
	3	＜疎外状況からの脱却＞ ①「＜対話＞を圧殺する社会」(論説)中島義道(『対話のない社会』P H P 新書・1997) ②「あなたの最も好きな場所」(小説)福永武彦・1968	①他者の存在が希薄な日本的社会では「対話」を圧殺することを論述したもの。 ②男女二人の対話という設定で、男の「最も好きな場所」を二人で訪れ、かつて何に怯えたかを探っていくことで過去を乗り越えていく話。	疎外状況が何から生まれるのか、そしてどのようにして脱却すればよいのかという手がかりをつかむことを意図した。①では日本的風土に即して生きることが対話を阻むという問題点に気づき、②では対話による分析が過去を乗り越える力となることをつかむ。	疎外状況の生まれる要因を認識し、その脱却方法の一つとして「対話による分析」が有効であることを認識する。	①事例の用い方を通して、『世間』の存在が『他者』・『対話』を拒否する日本人のあり方につながる」とする結論への導き方を検討する。 ②一見かみ合っていないかに思える二人の会話が象徴的に収束する過程をつかむ。	○単 元 の ま と め の 文 章 (8 0 0 字 小 論 文)